説教要旨　「憎い相手がそこにいて」

ルカによる福音書１７章２０～２５節

「神の国はいつ来るのか」（20 節）とファリサイ派の人々が現れてイエス様に尋ねました。それは神の民であるイスラエルが、異邦人であるローマの支配から解放され、ユダヤ人の独立国家が建てられるのは具体的にいつなのか。あなたはどの程度の目算をもっているのか。という問いです。神の民である自分たちが異邦人に支配されているという現実に不満を募らせる彼らに対して、「神の国はあなたがたの間にあるのだ」（21 節）。神の支配はもうすでに存在しているとイエス様は告げられたのです。

この箇所の直前の場面（ルカ 17:11-19）で重い皮膚病を患った 10 人は、ユダヤ人もサマリア人も関係なく、共に生活していました。互いに憎み合うユダヤ人とサマリア人が、重い皮膚病を患い、社会から疎外される中で、憎しみを乗り越えて共に生きていたのです。主イエスはそこに神の国、神の支配を見いだされた。民族を、宗教を、対立を乗り越えて、共に生きる世界。それこそがイエス様の言われる神の国、神の支配のあり方です。

イエス様はファリサイ派の人々のことを「外っつらばかりきれいにして、その実内側は強欲と悪意に満ちている」。などと厳しく非難をし、その結果ファリサイ派の人々はイエス様に激しい敵意を抱くようになりました。（ルカ 11:37-54）。今、ファリサイ派の人々の間にいるのは、憎い憎いナザレのイエスです。あなたがたの間にいる、あなたがたの憎んでいる相手と共に生きること。そこに神の国がある。それが神の支配に生きることなんだと、イエス様は彼らに語りかけておられるのです。

神の国は安易な道の先には決して存在しません。イエス様が示してくださった神の国への道は、憎い相手、嫌いな人と、それでも共に生きようとする所に実現するからです。イエス様は多くの苦しみを受け、憎まれ、排斥され、十字架にかけられました。このイエス様の姿を見つめ、そのみ言葉にしっかりと留まりましょう。苦しみ、憎まれ、排斥されている人と共に生きるとき、そこにこそ神の支配が実現するのです。

（２０２０・２・２３　説教者：稲垣真実）